

2014年1月5日 主日礼拝説教(要約)

聖書 ルカによる福音書 2章 25～35節

説教「あなたの救いを見た」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

クリスマス・カードや聖誕劇にはほとんど登場することがありませんが、ルカによる福音書のクリスマス物語には、野の羊飼いたちとは別に、幼子イエスと出会い、神を讚美した一組の証人たちのことが記されています。シメオンという老人とアンナという女預言者です。彼らは、イスラエルの救いを熱心に待ち望んでいた人たちでした。

イスラエルの民の歴史は、総じて苦難の歴史でした。国が栄えて平和を享受できたのは、紀元前10世紀のダビデ、ソロモン時代だけでした。その後、国は南と北に分裂し、北王国はアッシリアによって滅ぼされ、南王国はバビロンによって滅ぼされ、主だった人々は異国に連れていかれます。その後、民の一部は故国に帰還しますが、独立した国を再建することはできず、帰還した民はペルシア、ギリシア、ローマといった大国に支配されていきます。彼らは神殿を再建し、信仰共同体を組織しますが、先祖伝来の信仰と伝統は崩れ去っていくばかりでした。

主イエスがお生まれになったのはそんな時代でした。けれども、そこに少数ですが、シメオンやアンナのように御言葉の約束を信じ黙々と祈りに生き抜いていた人たちがいました。そうした人々がイスラエルの信仰を支えていたのです。

シメオンは自分のことを何も語らず、経歴や経験を誇りもしません。ただひたすら来るべき方に思いを向けて祈り続けていたのです。そしてついに待望の救い主に出会えたとき、彼は、ごく普通の、いやむしろみすぼらしいといってもよい彼らの姿につまずくことなく、幼子イエスに神のかねてからの約束の成就を悟ったのでした。

祈りに生きるとは、世間からは知られず、目立たぬことですが、忍耐を要する厳しい業です。祈っていて何になるかとは、祈らない世間がよく言うことですが、祈り続けるとは、自分たちの課題や重荷から逃げないこと、目覚めているということです。

教会が「祈りの家」であるということは、シメオンのように祈りを担うということでしょう。修道院の存在が中世の世界を支えたように、今日の世俗化し混乱した世界に、祈り続ける教会があることは重要です。そして教会の歴史は華やかに振舞う人々によってではなく、名もなき人たちの祈りによって担われ支えられるのです。

からだが弱り、思うように動けなくなる老年期に、祈りにおいて主と教会に仕えることができるのであれば何と幸いなことでしょうか。ある先生の説教集にこんな勧めが書かれていました。「時間的にゆとりのある老年期が祈りの日々となるために、わたしたちは多忙で壮んな時期においてこそ、祈りの習慣をつけておくべきである」と。

ところで、シメオンは、孫かひ孫のような主イエスを抱いて、何とかかわいい赤ちゃんだと目を細めている好々爺ではありません。彼は、聖霊に導かれた預言者として、この幼な子がこれから歩まなければならない苦難の道をすでに見抜いています。救い主誕生の喜びの中にすでに差し込んできている十字架の影に気づいているのです。

「この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています—あなた自身も剣で心を刺し貫かれます—多くの人の心にある思いがあらわにされるためです」(34～35 節)。主イエスのもとに、人は神に立ち帰るか、神に逆らうかどちらかに分かれます。しかし、主イエスは自らの苦難を通して私たちを救ってくださる方です。主の死によって、私たちは罪を贖われ、神との和解が与えられ、永遠の生命が約束されるのです。母マリアはこのシメオンの言葉をどのような思いで受けとめたことでしょうか。

けれども、救い主として誕生された幼子イエスの生涯と使命を見通すことができたからこそ、シメオンは歌います。「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり、この僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです」(29～30 節)。

これで安心して死ぬる、もう死なせてくださってよい、というのです。なぜ、そう言い切ることができたのでしょうか。それは、この救い主が、私たちの死から罪のもたらす呪いと滅びを取り去ってくださることを確信できたからです。安心して死ぬるとは、早く死にたいとかコロリと死にたいという躁言とは違います。裏返して言えば、許される限り、たとえ心身の不自由があっても喜んでせいっぱい生きようということです。使徒パウロは主イエスの救いにあずかった喜びの中で「わたしにとって、生きることはキリストであり、死ぬことは利益なのです」(フィリピ 1：21 以下)と語っていますが、シメオンと同じ心境でしょう。

さらに、シメオンは自分の安心を歌うだけではありません。「これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです」(31～32 節)。この救いがイスラエルの民を越えて、異邦人をも包むものであること、キリストの福音はすべての人に宣べ伝えられるべきものであることを証ししているのです。

「わたしはこの目であなたの救いを見た」とシメオンは歌います。シメオンは実際に、自分の腕に抱いて主イエスを見たのですが、それ以上に信仰の目でしっかりと神の救いの御業を見たのです。十字架の言に私たちに救いをもたらす神の力を見たのです。生きているときも死に臨んでも、私は主イエス・キリストのものであり、神のあわれみと愛の中に確かに受け入れられていることを確認したのです。私たちもこの恵みを確認して、2014年の歩みを進めてまいりましょう。